

幼児期の子の発達への不安が親の情報行動に与える影響の調査 —— インターネット調査による傾向の分析——

常川真央*
*中央大学文学部

*mtsunekawa493@g.chuo-u.ac.jp

本研究は、乳幼児期の子を持つ親の発達不安が情報行動に与える影響を明らかにすることを目的に、インターネット調査を実施した。有効回答は 831 件で、分析の結果から子の発達への不安が高い親は、専門家による情報を求める傾向が有意に高い傾向を示した。結果から、発達不安は情報行動全般を直接規定するのではなく、特定領域における情報ニーズに影響を与えることが示唆された。

Parental Anxiety About Early Childhood Development and Its Influence on Information-Seeking Behavior An Analysis Based on an Online Survey

TSUNEKAWA Mao*
*Faculty of Letter, Chuo University

1. はじめに

2005 年に発達障害者支援法が施行されて以降、国内では発達障害が広く認知されるようになり、幼少期からの早期の発達支援に向けた様々な政策や専門機関による取り組みが行われている。

発達支援の観点で重視されているのが保護者支援である[1]。発達障害を持つ幼児が発達支援サービスに早期にアクセスする上で、保護者である親は欠かせない存在である。しかし、現実には保護者が子供の発達障害を認識し、発達支援サービスにつながっていく意思決定は、様々な困難が生じている。発達障害をめぐる情報はウェブ上に氾濫しており、誤情報も含んだ中から適切な情報を得るためには、高いリテラシーが要求される。行政や医療機関が提供する発達支援が適切に届くためには、こうした意思決定の障壁を取り除くための親に対する支援が必要である。そこで、発達支援事業では親に対する相談支援などの保護者に対する支援の取り組みも行われている。

親に対する適切な支援を行うためには、親が子の発達障害に向き合いながら、どのように発達障害や発達支援に関する情報を受け取っているかの実態解明が必要である。発達支援の領域では、母親の育児不安に関する研究[2]において発達不安と情報行動の関係性を部分的に調査しているものの、十分ではない。

そこで、本研究では、乳幼児期の子の発達への不安の度合い（発達不安）が高い親は、育児に関する情報の情報探索行動にどのような特徴があるのかを明らかにする。

3. 研究手法

3.1 調査対象と調査方法

本研究では、インターネット調査による質問紙調査を行った。調査期間は 2024 年 8 月 23 日から 30 日である。NTT ドコモ（以下、調査者）に調査を委託し、事前質問を通じて未就学児の長子を

養育する 20 代から 40 代の親 1,020 名から協力を得た。

質問項目は主に (1) 長子年齢・月齢、(2) 子どもの発達への懸念、(3) 育児に関する情報のニーズ、(4) 育児に関する情報へのアクセス状況、の 4 つの質問群により構成した[3]。子どもの発達への懸念 (質問 2) についての質問では、懸念の内容として「言葉話す能力」や「運動や身体の発達」など 5 つの領域を設定し、それぞれについて懸念の度合いを 5 件法によって質問している。なお、本研究では質問 2 の領域ごとの得点およびその合計を「発達不安度」と呼ぶ。

なお、本調査の実施にあたり、中央大学文学部の研究倫理審査委員会による審査を受け、承認を得た上で実施された (管理番号: 2024-027(1))。調査対象者には、研究目的と個人情報の取り扱いについて事前に説明を行い、回答をもって同意を得た。著者が調査者より得た回答データは匿名化されており、個人が特定される情報は含まれていない。

4. 結果

調査の回収結果は 1,020 人、有効回答者数 831 人 (有効回答率 81.5%) であった。年齢・月齢の分布は 1 ヶ月未満が 7 件 (0.72%)、1 ヶ月～1 歳未満が 69 件 (8.30%)、1～3 歳未満が 245 件 (29.48%)、3～7 歳未満が 511 件 (61.49%) であった。

4.1 発達不安度の状況

発達不安度について、領域ごとの基本統計量は表 1 の通りである[4]。すべての領域で平均値ならびに中央値は 2 (どちらでもない) を下回っている。なお、発達不安度 (合計) の最大値は 24.0、第 3 四分位は 12 である。以降、発達不安度 (合計) を標準化した得点 (Z 得点) を基準として標本を「高不安群」($Z > 1.0$, $n=128$)、「中間群」($-1.0 \leq Z \leq 1.0$, $n=560$)、「低不安群」($1.0 < Z$, $n=143$) の

3 群に分類する。

表 1 領域別の発達不安度の統計量

領域	平均値	中央値	標準偏差
言語理解	1.26	1.0	1.19
言葉を話す	1.31	1.0	1.21
コミュニケーション	1.58	1.0	1.21
身体・運動	1.27	1.0	1.10
食生活	1.78	2.0	1.20
睡眠	1.49	1.0	1.14
合計	8.70	8.0	5.47

4.2 発達不安度と情報ニーズの関係性

育児に関する情報ニーズの集計結果を示す (表 2)。回答者全体では、「育児に関する行政支援やサービス」を求める回答者は全体の 47.2% であり、他の情報ニーズと比べて高い割合を示した。次いで、「育児に関する経験談」(43.4%)、「専門家による情報や解説」(42.4%) が比較的高い割合を示している。

発達不安度の分類別の情報ニーズの差異について、高不安群は「専門家による情報や解説」に対する情報ニーズを比較的高く求めていることが分かった。情報ニーズのうち、「専門家による助言や解説」、「育児や医療に関する統計データ」、「育児に関する行政支援やサービス」は高不安群が他の群よりも高い割合で求めている。特に、「専門家による情報や解説」について中間群は 40.9% であるのに対して、高不安群は 60.9% が求めている。これらのうち、中間群と高不安群における各情報ニーズを求める割合の差について、Wald の比率検定を実施した。その結果、「専門家による助言や解説」について両群間に有意な差が有意水準 1% で認められた。一方で、「育児に関する経験談」「育児に関するグッズ」「イベント情報」については中間群と比べて高不安群の情報ニーズが高いという結果は得られなかった。

表 2. 情報ニーズの種類（発達不安群別）

Q4 あなたは育児に関して どのような情報を求めていますか？	発達不安度（合計）による分類			合計
	低不安 (n=143)	中間 (n=560)	高不安 (n=128)	
専門家による助言や解説**	45 (31.5%)	229 (40.9%)	78 (60.9%)	352 (42.4%)
育児や医療に関する統計データ	32 (22.4%)	152 (27.1%)	41 (32.0%)	225 (27.1%)
育児に関する経験談	49 (34.3%)	254 (45.4%)	58 (45.3%)	361 (43.4%)
育児に関する行政支援やサービス	54 (37.8%)	271 (48.4%)	67 (52.3%)	392 (47.2%)
育児に関するグッズ	32 (22.4%)	164 (29.3%)	31 (24.2%)	227 (27.3%)
イベント情報	28 (19.6%)	90 (16.1%)	19 (14.8%)	137 (16.5%)
求めていない	42 (29.4%)	118 (21.1%)	13 (10.2%)	173 (20.8%)

**中間群と高不安群との間の独立性に有意差あり (p<0.01)

5. 結論

本研究では、乳幼児期の子どもの発達に対する親の不安（発達不安）が高い場合に、育児に関する情報行動にどのような影響を与えるかを明らかにするため、インターネット調査を実施した。その結果から、発達不安の高い親（高不安群）は「専門家による助言や解説」に対して高い情報ニーズを抱えていることが分かった。

今後の展望として、情報ニーズに影響を与える発達不安の種類についてより詳細な分析を行いたい。また、メディアの利用状況の特徴について本調査による回答データを分析する予定である。本調査では育児に関する情報への情報過多や有用性、ならびにメディアごとの情報アクセス頻度や信頼性の評価についても質問している。こうした質問項目に基づき、発達不安が高い親の情報探索行動の傾向について明らかにしたい。

援に関する文献検討—保育所・児童発達支援センターの支援に焦点をあてて—, 福祉社会デザイン学研究, 2025, vol.2, p.271-283.
<https://doi.org/10.34428/0002001507>, (参照 2025-10-21).

- [2] 井梅由美子, 乳幼児を持つ母親の育児不安と子育て支援資源の利用について, 東京未来大学研究紀要, 2017, vol.12, p.1-12.
<https://doi.org/10.2974/kmj.72.177>, (参照 2025-10-21).
- [3] 詳細な質問項目は附録 1.に示す。
- [4] 発達不安度は、子の発達への懸念の質問(質問 2)を間隔尺度として集計した。選択肢の得点については附録 1. を参照。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP19K20625, JP25K21523 の助成を受けたものです。

注・文献

- [1] 岡村泰敬, 幼児期の発達障害児の保護者への支

附録 1. 質問項目の概要

質問 1. 長子年齢・月齢 選択肢： 1. 1ヶ月未満 2. 1ヶ月～1歳未満 3. 1～3歳未満 4. 3～7歳未満 5. 7歳～12歳 6. 13歳～
質問 2. 長子の発達への懸念 領域： A) 言葉の理解 B) 言葉を話す能力 C) 周囲の人とのコミュニケーション D) 運動や身体の発達 E) 食生活 F) 睡眠時間・睡眠リズム 選択肢： 1. とても心配している(0点) 2. 心配している(1点) 3. どちらでもない(2点) 4. あまり心配していない(3点) 5. まったく心配していない(4点)
質問 3. 育児に関する情報ニーズ
質問 3.1. どのような情報を求めているか 選択肢： 1. 専門家による助言や解説 2. 育児や医療に関する統計データ 3. 育児に関する経験談 4. 育児に関する行政支援やサービス 5. 育児に関するグッズ 6. イベント情報 7. その他 8. 求めている
質問 3.2. 育児情報をどの程度受け取っているか 選択肢： 1. とても多い 2. 多い 3. 適当である 4. 少ない

5. 少なすぎる
質問 3.3. 育児に関する有用な情報はどの程度得られているか 選択肢： 1. 十分得られている 2. ある程度得られている 3. どちらでもない 4. あまり十分ではない 5. まったく十分ではない
質問 4. 育児に関する情報行動
質問 4.1. 育児に関する情報を入手する媒体 領域： A) 書籍・新聞・雑誌 B) テレビ番組／ラジオ、ポッドキャスト C) ブログ・ウェブサイト D) 動画投稿サイト／配信サービス E) SNS F) 知人や家族との会話（LINEなどの電子媒体を含む） 選択肢： 1. 毎日 2. 週に4～6回 3. 週に1～3回 4. 月に1～3回 5. ほとんど利用しない
質問 4.2. 4.1.以外の情報源（自由記述）
質問 4.3. 情報源から得られる育児情報の質 領域： （質問 4.1.に同じ） 選択肢： 1. とても信頼できる 2. 信頼できる 3. どちらでもない 4. あまり信頼できない 5. 信頼できない